《研究報告》

# 現代イランの社会変容と詩的言語をめぐる視座

中　村　菜　穂*

# Perspectives on the Transformation of Society and Poetic Language in Contemporary Iran

Naho NAKAMURA

Modern Persian poetry in Iran emerged in the 20th century, after a millennium-long tradition of classical Persian poetry. Understanding it as either a negation of traditional poetry or its inheritance fundamentally affects the way we perceive contemporary Persian poetry. The modernization of poetry began during the period of the Constitutional Revolution, but it was not until the mid-20th century that the reform of prosody by Nima Yushij blossomed into a New Poetry (sheʿr-e now) with the success of the younger generation of poets. The ideals of freedom and liberation motivated the rise of modern Iranian poetry, until the 1970s. Accordingly, the traditional aspect of modern poetry has not received adequate consideration. Moḥammad Reẓā Shafīʿī Kadkanī's *Ṣovar-e khiyāl dar sheʿr-e fārsī* (1971) provides a useful basis for determining from the characteristics of the poetic language in contemporary poetry, the extent to which it inherits the vocabulary and system of meaning in classical poetry, or the extent to which originality and the inner lives of individuals are manifested therein. This ongoing research aims to apply a comprehensive perspective to contemporary Iranian poetry, by combining a close reading and analysis of the book alongside individual studies of contemporary poetry.

キーワード：ペルシア詩、現代性、詩的言語、詩的形象、イスラーム修辞学
Keywords: Persian poetry, modernity, poetic language, poetic image, Islamic rhetoric

* 大阪大学大学院人文学研究科講師
nakamura.naho.hmt@osaka-u.ac.jp

© 立命館大学アジア・日本研究所
『立命館アジア・日本研究学術年報』2024, PRINT ISSN 2435-421X ONLINE ISSN 2435-4228, Vol.5, pp.92-97.

## I. 詩と抵抗の現在

2022 年 9 月、22 歳のクルド人女性マフサー（ジーナー）・アミーニーの死をきっかけとして始まった大規模な抗議運動は、瞬く間にイラン全土へ広まり、国外の諸都市に住むイラン系の人々がこれに呼応した。イランではこれ以前にもたびたびガソリンの値上げや水不足、経済危機への対応などをめぐって抗議運動が起こっていたが、この近年の動きで特筆すべきことは、女性の権利要求の訴えが前面に押し出されていたことであり、デモの参加者の主体を女性たちや若年層が占めていたことだった。同時に、逮捕、拘束、市民に対する武器の使用といった、政府が用いる暴力的な手段への抗議の意を込めて、路上や大学等での様々なパフォーマンス・アートが試みられ、映像や写真、声や文字、音楽を付してネット上に拡散されたことも大きな注目を集めた。多くの抵抗歌や音楽――そのジャンルは伝統音楽から、ジャズ、ヒップホップまで多岐にわたる――が SNS で共有され、広がりを見せたことも、文化的側面から見逃すことのできない点の一つだったといえる。なかでも、シェルヴィーン・ハージープールの歌った短いバラード「バラーイェ（～のために）」は、一つの前置詞だけを用いた簡素な叙述の形式と抒情的なメロディーに乗せて、SNS 上に上げられたイランの人々の願望、怒りや悲しみの言葉を拾い上げて作詞したもので、世代を越えて多くの人々に共有され、空前のヒット曲となった。

このような文化・社会状況と詩の動向との関わりは、本研究の関心を寄せるテーマの一つであるが、上述の様々な抵抗歌のなかに、モハンマド・タギー・バハール（1886–1951）やアーレフ・ガズヴィーニー（1879 頃 –1934）といった、20 世紀初頭の立憲革命期の詩人たちの詩が含まれていたことや、現代詩や古典詩の有名な詩人たちの詩句が共有されたことは、詩を愛する人の多いイランならではの文化的な表れといえるだろう。一方で、今日、いわゆる現代詩人たちの活動はさほど目立っていない。近代の立憲革命運動の折には、詩が社会を動かすメディアとしての役割を果たしたが、現在ではソーシャルメディアや他の芸術分野がその役割を担っているという見方もできるだろう。身体性や声、視覚といったパフォーマティヴな要素や人々の直接的な経験に訴える分野に注目が集まっている反面、詩の現状はどのように見るべきだろうか。今日、詩の低迷が指摘されているとするならば、そのような言葉の危機はどの程度深刻なものであり、現今の社会・経済状況・政治がもたらす精神的な側面とどのように関わっているのだろうか。以下では、現代詩研究の近年の動向と、これらに関連して重要な鍵となる、伝統的な詩の特徴の一つであるペルシア語の詩的言語をめぐる研究の概略を述べることにしたい。

## II. イラン現代詩史への問い直し

### 1. 現代詩における「個」と社会

イランの芸術のみならず、知識や教養、文化全般において詩（sheʿr）が重要な役割を果たしていることについては、研究者に限らず、イラン文化に関わる多くの人々によって言及されてきた。ペルシア語の古典文学、なかでもフェルドウスィー（1025 年没）、ハイヤーム（1131 年没）、ルーミー（1273 年没）、サアディー（1292 年頃没）、ハーフェズ（1390 年頃没）といった大詩人たちの作品は、その点でペルシア語独自の文化的・精神的支柱を形成しているといえる。このような詩や詩人の社会的位置づけの高さは、古くから見られた詩人と宮廷との結びつきや、詩が学問一般や古くから伝

えられた叡智に根ざすものであり、それらをペルシア語を共有する人々の集合的記憶にとどめ、広範な地域へと、また後世へと伝達する媒体であった点に由来すると考えられる。他方で、口承詩や歌謡といったジャンルは、公的な文学としての詩と密接な関わりを持ちつつ、周辺的な位置づけを与えられてきた（中村, 2022a: 19-27; 164-165）。

詩の革新の動きが始まったのは、19世紀末から20世紀初頭にかけてのイラン立憲革命期である。社会的な活動家でもあった近代の詩人たちは、主として伝統に則った韻律形式を用い、政治・社会的な主題で、近代的な語彙や日常語、俗語を取り入れて作詩した。韻律形式の変革も徐々に試みられたが、そのなかで、イラン現代詩の祖と呼ばれるニーマー・ユーシージ（1897–1960）によって、伝統的な対句形式を廃した自由韻律詩が編み出され、後の世代の詩人たちによって継承された（前田, 2009）。

1920年代から1940年代は形式のうえで「新しい詩」へと移行していく過渡期とみなされる。しばしばイラン・ロマン主義の名で呼ばれる思潮および死や孤独、虚無、絶望といったテーマが詩人たちの詩を覆い、「私とは何か」という問いが顕著に現れるようになるのもこの時期である。このような近代的な「個」の発見は、現代詩の特徴的な要素であり、その後の詩、例えばフォルーグ・ファッロフザード（1934–67）の作品における、絶えざる不安や空虚さ、深く果てしのない孤独の観念にも通じている（中村, 2009）。

「新しい詩（sheʿr-e now）」の名で総称されているイランの現代詩（ここでは定型詩以外の自由形式の詩を指している）は、1950年代から1970年代にかけて隆盛の時代を迎えた。ニーマーの弟子たちと目される、アフマド・シャームルー（1925–2000）、メフディー・アハヴァーネ＝サーレス（1929頃–90）、フォルーグ・ファッロフザード、ソフラーブ・セペフリー（1928–80）らは、現在に至るまでイラン現代詩の最も優れた詩人たちと称される。総じて1970年代頃までの詩を率いたのは自由と解放の理念であったといえる（中村, 2022b: 172-173）。新潮流を標榜する様々な動きが現れたが、なかでも形式の面で、韻律からのさらなる解放を目指したシャームルーによる非韻律詩（sheʿr-e sepīd）が人気を博した。

詩の主題との関わりでいえば、現代詩はほぼ必然的に現実の政治・社会への批判的立場を担うことになった。現代詩人たちの多くは多かれ少なかれ左派的な傾向を持っていたが、政権に対する反対運動の高まりとともに、詩や詩人に対するイデオロギー的解釈や評価も強まっていった。現代詩に関するまとまった研究や批評は1960年代頃から現れたが、政治性から距離を置く詩に関しては否定的な判断が下されるなど、思想的傾向は現代詩研究や現代詩史の記述にも少なからず影響を及ぼした。

## 2. イスラーム革命後の現代詩と研究状況

1979年のイスラーム革命と、それに続いた反体制派への弾圧により、詩人たちの一部は、地下活動に入るか、国外への移住か、いずれかを選ばざるを得なくなった。この時代を境にして、イランの現代文学全般おいて国内の文壇と国外の（ペルシア語や他の言語を含む）創作活動への分裂状態が生じ、現在に至っている。

この時期、革命前から活躍していた詩人たちのうちで、フーシャング・エブテハージ（1928–2022）やスィーミーン・ベフバハーニー（1927–2014）といった、現代詩人のなかでも定型韻律を用いて詩作した詩人たちが創作を続けたこと、それとは異なってアフマドレザー・アフマディー（1940–2023）

のような、日常性に近い言語で語る詩人が共感を持って迎えられたことは、現代詩の展開にとって示唆的である。革命後から現在まで、それほど目立った詩人は現れていないものの、ニーマーの創始した自由韻律詩が影を潜めていき、代わって、韻律を廃した非韻律詩と、伝統形式の抒情詩（ghazal）とが、近年の現代詩を二分しているといわれる（ʿĀbedī, 2024）。詩の受容に関しては、古典詩が変わらず愛誦されているのと並んで、著名な現代詩人たちの作品はすでにイランの人々の知的教養の一部となっている。研究の面では、特筆すべき点として、現在までの様々な状況の変化を受けて、現代詩史の語り方にも変化が生じている。特に、左派イデオロギーの後退によって、従来の詩人の価値づけは見直されつつあり、かつての政治的立場による評価において見落とされた詩人たちや、近現代の定型詩人たちへの再評価が進められつつある（ʿĀbedī, 2024）。

## III. ペルシア詩の詩的言語をめぐる研究

イランにおける詩の近代化に関して、一つの根本的な問題は、詩における伝統と近代の捉え方である。すなわち、現代詩を伝統的な詩に対する否定と考えるか、それともそれを継承するものとして捉えるかによって、詩についての理解はかなり異なったものになると考えられる。鍵となるのは、ここで主にイランの現代詩と呼んでいる自由韻律詩が登場する以前の「近代詩」、すなわち立憲革命期の詩の位置づけである。この点は、1920 年前後に生じていた新旧論争の決定的な対立点でもあり、近代化を志向した詩人たちのなかでも穏健派と急進派の亀裂となって現れた（中村, 2022a: 387-421）。結果として後者の、伝統やあらゆる旧来的な制度に対する反逆はその後の現代詩において重要な立脚点となった。しかしなお、詩の変革は単に韻律形式上の変化にあるわけではない、ということも、詩人たちによって指摘されてきた（小野寺, 2008）。例えば、「月」や「薔薇」といった一語を現代の詩人が用いる際には、古典詩の長い伝統において形成された、ある種の連鎖構造を持つ詩的イメージ群と、それに付随する文学的連想や伝統的な思考の体系を否応なく引き寄せてしまう。また、たとえ新しい語彙が用いられていたとしても、それらの語彙を結びつける内的構造に変化が生じていないとすれば、そこにはある種の伝統の継続が認められることになるだろう。この点を明らかにするためには、個々の詩の読解と解釈を通じて、それぞれの詩人に特徴的な言葉遣いの性質を見極めることが必要となる。また、それによって韻律形式以外の要素から、詩の革新の内実に迫ることができると思われる。

このような詩的言語の分析において有益であると思われるのが、ペルシア文学の著名な学者であり、現代詩人でもあるモハンマドレザー・シャフィーイー・キャドキャニーの『ペルシア詩における詩的形象』（Shafiʿī-Kadkanī, 1971）である。同書は、西暦 11 世紀頃までのペルシア詩の比喩および詩的イメージの変遷を扱った研究書であり、批評的著作の面も有している。ここで「詩的形象」と訳している “ṣovar-e khiyāl” の語は、ヨーロッパ系言語において比喩表現を指して用いられるときの image に相当し、文字通りには「想像の形象」とも訳しうる。この研究の主眼は、ペルシア詩の始まりの時代において、自然の事物とのある程度の直接的な結びつきを有していた詩の語彙が、時とともに他の詩人たちによって踏襲され、繰り返されることで、詩的イメージとしての新鮮さを失っていき、やがては詩人たちの観念的操作の対象となるような、抽象的な定型句（クリシェ）と化していく過程の分析にある。特に、宮廷詩におけるパトロンと詩人との関係や、神学やその他の学問の進展による概念的制約、さらに詩論そのものが詩の硬直化に及ぼした影響など、当時の詩作を取

り巻く環境や知的状況についての考察は、同書の魅力的な部分の一つである。だがそのうえで、この著作を読解するにあたって不可欠、かつこれらの議論の普遍的な土台となっているのは、9世紀以降のイスラーム圏でギリシア哲学を受容しつつ独自の発展を遂げたイスラーム修辞学（balāghat）の伝統である。

イスラーム修辞学に関して、アラビア語では膨大な数の著作が書かれたが、その一部は翻訳を介してペルシア語の詩学にも大きな影響を与えたとされる。興味深いことに、その影響は現代まで及び、厳密さ・複雑さを極めた伝統修辞学の個々の分類は措（お）くとしても、基本的な枠組みは現在のイランにおける文学論の基礎をなしている。近年では、そこにヨーロッパにおける文学理論を取り入れるかたちで現代イランの修辞学と呼ぶべき学問領域が形成され、関連書籍が刊行されている。こうした現代の議論において、詩的形象をめぐる議論は、伝統的な範疇に従い、主として「転義」を扱う「表現論」と呼ばれる分野に含まれている。またシャフィーイー・キャドキャニーの著作が基本文献となった現在、「詩的形象」の語は純然たる修辞学の一項目として扱われている趣もある。ただし、『ペルシア詩における詩的形象』において、シャフィーイー・キャドキャニーは、この伝統修辞学の領域を単に典拠として用いただけではなかった。むしろ、伝統的な学者たちの分類癖や図表的思考様式そのものに疑問を投げかけ、時に批判を行なっている。その理由は、修辞学の議論はある程度、研究や分析の役に立つものであるとはいえ、あまりに厳格で詳細な規範化は、詩作や、芸術的創造において、詩人や学者たちの思考を制限する役割を果たしたと考えられるためである。この考察を発展させ、後に「クロスワード・パズルの詩」（Shafīʿī Kadkanī, 1998）と彼が呼んだ、詩的言語の概念的操作への批判は、今日の人工知能をめぐる問題や機械化された言語観への警鐘も含んでいる。

## IV. 今後の課題と展望

以上のように、イランの現代詩およびペルシア語の詩的言語に関わる分野は広範囲にわたっているが、目下、筆者が取り組んでいる課題を以下に三点、述べたい。第一は、イランの現代詩に関する継続的な研究・翻訳と資料調査である。特に現代詩の詩人たちや作品、現代詩史に関しては、日本語での翻訳や資料が圧倒的に不足している現状がある。古典文学の主要な作品でもいまだ日本語訳が揃っているわけではなく、例えば、既訳が存在する最も名高い詩人の一人であるハーフェズの詩の一編でさえ、ハイヤームの『ルバイヤート』ほどには知られていない。さらに、20世紀の重要な詩人たちについてもごくわずかの翻訳しかないなかで、21世紀の新たな詩人たちの翻訳・研究にあたるには、前提となる情報や研究蓄積の不足を克服する基礎作業が必要となる。そのうえで、イラン本国および欧米での研究がある程度充実してきているという、近年の研究潮流への考察も取り入れつつ、これまで進めてきた翻訳・研究の成果を公開していくことを目指したい。

第二に、上で述べたシャフィーイー・キャドキャニー著『ペルシア詩における詩的形象』の読解・翻訳と分析である。筆者は、科研費・若手研究「ペルシア詩の直喩／隠喩理論の変遷とその思想的背景：現代イラン修辞学の観点から」（課題番号24K16035）に現在取り組んでおり、特に、イスラーム修辞学のイランにおける受容や現代ヨーロッパの比喩に関する理論との比較研究を進めている。ペルシア詩の重要な特徴である「喩え」に関するシャフィーイー・キャドキャニーの論点には、ペルシア語の詩的言語がたどった歴史的過程についての示唆が含まれており、この点を明らかにする

ことが研究上の喫緊の課題となっている。

第三は、第一の点にも関わるが、インターネットやSNSの普及などの急速な情報・技術革新が進む現代において、詩の動態をより多角的かつ多面的な視点から考察することである。現代イランにおける詩の発表媒体は、雑誌や個人詩集のほか、ウェブサイトや動画配信など多様化が進行しており、それに応じて人々の詩の受容のあり方も変化を見せている。こうした言語・社会に関わる変容の実態については、詩作データの収集と分析に加え、臨地調査を通じて明らかにしていきたいと考えている。

※本報告は、科研費・若手研究「ペルシア詩の直喩／隠喩理論の変遷とその思想的背景：現代イラン修辞学の観点から」（研究代表者：中村菜穂、課題番号24K16035）、基盤研究（B）「ネット時代に復興する詩と語り物：アジア西方イスラーム圏のオーラル文化の現状と展望」（研究代表者：竹田敏之、課題番号23H03635）の成果の一部である。

**参照文献**

小野寺菜穂（2008）「ナーデル・ナーデルプール「新しい認識」についての考察：イラン現代詩における比喩表現の革新と文学的伝統」『イラン研究』4号，81-93頁.

黒柳恒男（2022）『増補新版ペルシア文芸思潮』東京外国語大学出版会.

鈴木珠里・前田君江・中村菜穂・ファルズィン・ファルド編訳（2009）『現代イラン詩集』土曜美術社出版販売.

中村菜穂（2009）「暗闇からの飛翔：フォルーグ・ファッロフザード（1935-1967）における詩的現代性をめぐる試論」『イラン研究』5号，210-233頁.

――――（2022a）『イラン立憲革命期の詩人たち：詩的言語の命運』左右社.

――――（2022b）「20世紀イラン文学における《閉ざされた場所》について」ワタン研究プロジェクト編，岡真理責任編集『現代イラン文学におけるHome/Homeland』京都大学大学院人間・環境学研究科岡真理研究室，161-185頁.

前田君江（2009）「真珠の首飾りの破壊者たち：韻律詩から新体詩へ」鈴木珠里・前田君江・中村菜穂・ファルズィン・ファルド編訳『現代イラン詩集』土曜美術社出版販売，126-131頁.

ʿĀbedī, Kāmyār. 2024. “Sheʿr-e Īrān dar sālī ke gozasht.” Īsnā, 20 March. https://www.isna.ir/news/1403010100025/شعر-ایران-در-سالی-که-گذشت (accessed on 21th March 2024).

Shafīʿī Kadkanī, Moḥammad Reẓā. 1971. *Ṣovar-e khiyāl dar sheʿr-e fārsī: taḥqīq-e enteqādī dar taṭavvor-e īmāzhhā-ye sheʿr-e pārsī va seyr-e naẓarīyeh-ye balāghat dar eslām va Īrān*. Tehrān: Āgāh.

――――. 1998. “Sheʿr-e jadvalī.” *Bokhārā* 1 (Mordād): 46-59.（邦訳：「シャフィーイー・キャドキャニー「クロスワード・パズルの詩」翻訳と解説」中村菜穂訳・解説『イラン研究』10号，130-152頁）